

人間の塔における相互扶助を歴史から考える

岩瀬裕子

(首都大学東京大学院博士後期課程、国立民族学博物館館外研究員)

【発表要旨】

スペイン・カタルーニャ州には 220 年以上にわたって続けられている人間の塔 (*castells*) がある。人が人の肩の上に上り下りして、身体ひとつで造るものである。人間の塔は各市町村の大祭や 2 年に 1 度、公式的に賞金をかけて争われる競技会でみられる。現在、カタルーニャ州には 104 のグループがあり (2019 年 5 月 6 日現在)、そのグループを束ねるコーディネーターへの登録のもと、それぞれの自由な時間を使って活動している。

そもそも、人間の塔は社会の最下層に位置していた人びとによって担われてきた。農閑期に塔造りをして地域を回っては、小銭を稼いでいたとされる。つまり、副業としての側面があったのである。ただ、その稼ぎを手にしていたのは、歴史的に塔造りを続けてきた家族や親族の一部であり、塔を支える最下部は主に巡業先の有志によって担われてきた。経済的に恵まれない人びとを助けるために、塔造りを通じた相互扶助 (*ajuda mútua*) が見られたのである。現在でも、この相互扶助は人間の塔の美徳とされ、グループの垣根を超えて、お互いの最下部を助け合う様子が見て取れる。その一方で、時にライバルグループ同士の争いにおいては、裏切り行為ともみなされることがある。

本報告の目的は、人間の塔における相互扶助をその歴史から考えることにある。

